

# 都市に住む人と盛り場

高萩盾男

## 一——さかる場としての市

旅をする人で、市が好きな人は意外と多い。札幌であれば二条市場や丸山市場、京都であれば錦小路、大阪は黒門市場などといった具合だ。その多くは、二間ほどの間口をもつ、露店に小屋掛けした程度の粗末なお店がひしめきあっていて、足の踏み場もないほどに商品が積みあげられている。裸電球が品物を大きく浮かびあがらせ、そのうしろから怒声が飛び交う。圧倒的に生鮮食品が多い。魚や野菜などだ。金沢での初夏。はじめての金沢の市場。昼下りだが、場内は薄暗い。尺ものの鯛や黒鯛にまじって、ひとときわざわざかに甘えびが裸電球に照ら

されている。いままでお目にかかったことのない鮮紅色。足が釘付けになってしまうほどの美しさ、その並びにはみどりもの間に苺がひかっている。ほの暗さのなかにあって、甘えびと苺。いかにも初夏の訪れを想わせた。

市場は季節を感じさせる。地域の生業なまわを思わせる。生活の匂いがある。そしてひとを魅きつける何かをもつ。これらのものを求めて旅人は市場に立つことになる。

## ①——近代的な商店街と猥雑な市場

都市はその地域の地域性を失ってしまった。というよりも、地域性を喪失することによって近代都市は成立しているといったほうがよい。

## 一——さかる場としての市

① 近代的な商店街と猥雑な市場

② 盛り場の原型

## 二——悪所としての盛り場

① 日常生活に対置する悪所

② 悪所の活力

## 三——盛り場の三つの性格

① 無縁性

② 辺縁性

③ 悪所

## 四——盛り場とコミュニティ

とくに、市街地再開発といわれて実施されている商店街づくりはどこも大同小異で、画一的な場合が多い。これは新幹線の駅の設計思想に似ているようだ。新幹線はどの駅も同じようにつくられていて、外構と構内も見分けのつく特徴をさがしにくい。駅名や都市名を示すプレートがなければ、どの駅にいるのか判断がつかない。在来線はその地域なりの特色を駅舎の建設に採り入れているが、新幹線にはそれが欠落している。近代合理的設計という結果の画一化なのであるが、明らかにこれは中央⇄地方という従属関係でとらえられる中央主義の地方無視の結果にほかならない。速度を競うという一点に凝縮される新幹線の思想は駅舎ばかりでな

く、路線の線形にもみられる。在来線であれば、その地域の大切と思われる田畑は用心深く迂回され、平地が山裾に寄ったギリギリの線に後退している。路線線形は等高線のように曲がりくねる。その集落の生活を犯さない配慮がなされている。しかし、新幹線は「ひかりは西へ」の光のように直進する。田畑があれば突っ切り、人家は跨ぎ、山はトンネルを拓く。地域の生活はまったく考慮されない。中央をそのまま地方に貫徹する姿しかそこにはない。

ちょうど新幹線との類推で都市づくり、商店街づくりをみてしまうのである。近代적であり合理的であり、したがって画一的であるまちの味気なさ。どこもかしこも美しく飾られ、きれいに磨きあげられており、したがって落ち着かず不安がます。ひとは反射光に弱く、反射率の高い材質で構成されている空間には永く居られない。そして、中央の都市空間様式を画的に受け容れている(ざるをえない)地域の都市づくり。

近代的とされる都市空間とあざやかに対決するように存在しているのが市場である。市場には人間の体臭が漂っており、それはときには猥雑と感じるほどである。きれいではないがきたなくはない。光り輝くほどに明るくはない、むしろほのかに暗い。季節を嗅ぎ分ける能力を必

要とされる。気取りはないが、気構えはいる。市場は都市が近代적であればあるほど、きわめて人間的な空間なのである。

## ②—盛り場の原型

市場を抽象概念に近づけると、市ということになろう。都市の形成の類型として城下町、宿場町、門前市などがあげられているが、市がたない都市は存立しえないだろうし、歴史的にはむしろ市がたつところにさまざまな類型の都市が形成されてきた場合が多い。

東京の新宿。日本最大のさかり場とされている。空襲をうけ、見渡すかぎりの瓦礫の山となる。しかし、敗戦日のわずか三日後からさかり場への繁栄の道を歩むことになる。二十八年八月十八日の東京都内主要紙の広告。転換工場並びに企業家に急售ノ、平和産業の転換は勿論、其の出来上り製品は当方自発の「適正価格」で大量に引受けに応ず、希望者は見本及び工場原価見積書を持参 至急来談あれ 淀橋区角筈一の八五四(瓜生邸跡)新宿マーケット 関東尾津組(東京焼け跡ヤミ市を記録する会・猪野健治編『東京闇市興亡史』)。終戦で納入先を失い、半製品をかかえて途方にくれていた軍需産業の下請業者は、露店商を統率していた尾津親分のもとにぞくぞく詰めかけた。八月二十日に

は(光は新宿より)のキャッチフレーズのもとに、葎簀張りの通称(尾津マーケット)が開かれた。ヤミ市の始まりである。その後、南口に和田マーケット、西口に民衆市場ができ、さらに国電の主要駅を中心にヤミ市は全都に広がっていった。

ヤミ市を解放区であるとする見方がある。「闇市においては、国籍、階級、身分、出身、学歴等は一切問われなかった。華族も、ヤクザも、軍人も、被差別窮民も、解放国民も同格であり、路上に一枚のゴザを敷いて、貧しい品物を売るところから出発した。(中略)身分制の呪縛と差別の長い歴史をもつ日本において、これは画期的なできごとである」(『東京闇市興亡史』)。この解放区には、自由と平等を体制から獲得した結果のものではないにせよ、既成の身分制と価値観から人々を解き放つ意味をもって、いたであろうことは事実である。

市が、それがヤミ市であるにせよ、解放区であったこと、そして、市を出発点としてさかり場が形成されていること、さらに、市の担い手がやくざ、香具師、強制労働を強いられた中国人や朝鮮人などが中核であったこと、すなわち日本人の多数派ではなく少数派であり、中心から離れた辺縁に位置していた人々であったことに注目する必要がある。

## 二——悪所としての盛り場

### ①——日常生活に對置する悪所

岩波・古語辞典の「あくしょ」（悪所、悪処）の項には、「地形や地味の悪い所」「仏教用語の善処の對」につづいて「遊里。遊廓。近世後期には、芝居町、料理茶店をもいった」とある。そして、悪所銀は遊興費、悪所狂いは遊里にいらびたつて遊蕩にふけること、悪所宿は遊女、若衆を呼んで遊興する家、などの用例をのせている。

廓は、その字が示しているように、また、江戸幕府公認の悪場所であった「吉原」が實際そうであったように、周囲を石や土で囲われ、堀などをめぐらせてあった。天保十四年（一八四三）の改正江戸大絵図をみると、吉原は市街地をはずれた田圃の真ん中、浅草寺の近くに置かれ、一般庶民の生活からは隔離されていた。悪場所としての吉原は、幕府という権力者によって、空間的に二重に庶民生活から隔離・分離され、さらに幕府のきびしい統制・管理下におかれていた。これは同じ悪所場とされた芝居も同様であり、江戸三座といわれた中村座、市村座、守田座は天保の改革によって浅草の猿蓑町に一括移転を命ぜられ、これまた、庶民の生活圏から線引きされてしまった。

廓や芝居が悪所場といわれ、権力のきびしい管理下におかれ、しかも、市民生活から分離されていたという事実は何を物語っているのか。

まずいえることは、庶民・市民生活空間から締め出されたということである。ひとびとが多く集まり、また愛好する場が悪所として、あるいは悪所とされたがゆえに日常生活圏外におかれた。すなわち、こうした遊びは日常生活とは対決するものであり、日常性とはなじまないものだったのである。廓や芝居は、ひとが行こうと思えばいつでも行くことのできる恣意性と開放性を特徴とする。悪所狂いはこのことを端的に示す言葉である。そのゆえに、日常性を脅かす存在なのである。悪所とは、日常生活とつねに對置しており、非日常的な行為であり、非日常的な場なのである。市民生活という日常性にとつては、非日常性の日常化は狂い以外のなものでもなく、その危険性を見越しての「悪」なのである。

### ②——悪所の活力

悪場所と對照的な遊びの場が祭礼法要であった。神社仏閣の境内では宗教的な行事を出発としつつもそこから離れていろいろな見世物が軒をならべ、各種の市がたち、おおぜいのひとびとでにぎわった。ことに若い女性にとつては、

夜歩きはこうしたときにかぎられたから、縁日、夜見世はいっそうはなやかさをました。

神社仏閣で催された祭礼法要は、しかしながら悪所あるいは悪所的なものとはみなされなかった。なぜなら、祭礼法要は日常生活のなかにあっては、それが定期的に繰り返されようとも、一回性、一場性のものであり、けつして日常化することがないからである。日常性に墮すことがないから、日常化する危険性もない。したがって、祭礼法要は「聖の領域」の高みにとどまることがのできるものであって、「悪の領域」とはみなされなかった。ひとびとは限定された時間と空間のなかで、一回、一場の遊びを楽しむことができたのである。

江戸、明治、大正、昭和を通して、浅草はわが国最大のさかり場であった。江戸時代には、浅草寺の祭礼法要がひとびとの娯楽として定着し、境内の奥山には各種の興業、見世物が常設されるようになった。奥山に小屋掛をしたということは、江戸の檜舞台を踏んだことであった。浅草寺の観音信仰、門前市、奥山の興行、そして江戸三座の芝居町、吉原の花街が一体となって、浅草というさかり場は形成されていった。

さかり場には、その非日常性ゆえに、つねに〈悪のイメージをもつ場〉として意識される。

その場合、〈悪〉が問題とされなければならぬ。悪には、災害や病気のような自然悪、人倫に反する道徳悪の総体として考えられている系統の用例がある。ひとにとって好ましくないもの、むしろ忌み嫌い、できれば避けて通りたいという用例である。しかし別の意味もある。源義平の異名である悪源太、いたずらっ子という悪太郎、悪事をして栄える謂の悪運が強いなどの系統である。これらは、反社会的というよりは、ただけしいほどに力強く、元気があり、通常、常識を超えた存在であるときに使用されている。このようにして、悪は、あるいはひとびとが対象として意識される悪は、おどろおどろしいほどの活力ゆえに、ひとを滅亡に追いやる反社会性をもつと同時に、ひとを蘇生させる潜在的社會性をもつ。すなわち、悪は兩義性が付与されているのである。

婚礼儀式を虚構として設定されている吉原、道行心中に同一化できる虚構としての芝居、これらの悪所でひとは日常性から離れ、非日常の虚構に遊ぶことになる。もし悪の反社会性のみを目を向けるなら、虚構の世界を文化の高みにまで推し進めていった活力の源泉を見失うことになる。近世庶民文化といわれるものは、絵画であれ、文学であれ、演劇であれ、こうした悪所を媒介としてしか生れえなかつたのである。

### 三——盛り場の三つの性格

#### ①—無縁性

市と悪所、両方ともさかり場にもっとも近い類縁語であるように思えるが、この関係はどうなっているのだろうか。網野善彦氏の『無縁・公界・楽』は多くの刺激を与えてくれる。著者は中世社会を通じてみられる〈私〉権力から無縁であろうとするさまざまな場や集団をとりあげ、その無縁性を抽出する。無縁性の全体像はつぎのように述べられている。「俗権力も介入できず、諸役は免除、自由な通行が保証され、私的隷属や貸借関係から自由、世俗の争い、戦争に関わりなく、平和で相互に平等な場、あるいは集団」。場や集団は無縁寺、駄込寺、自治都市、楽市楽座などがあげられている。市もそのひとつである。

市のたつところは、所有者・支配者が明確でない荒地、河原、それ自体無縁性を備えた寺社の門前などであった。市には、遍歴する商工の民、漂泊する芸能の民が蝟集し、著しいにぎわいをみせた。これら市を支えた主役が俗権力から〈無縁のひと〉であったことを忘れてはならない。

無縁所、悪所、ヤミ市解放区はそれぞれ時代が異なるとはいえ、共通したものがあつた。それは俗世間、俗権力、俗界、これをひっくり返す日常性というところ、日常性から縁を切ったところ、存在していることである。また、そこに生きたひとは主従関係、親子関係などの世俗から縁を切った(縁の切れた)ひとたちであった。そして、日常の極枯から自由であるのと裏腹に野垂死を覚悟しなければならなかつた。

さかり場は、さまざまな機能があるとされ、それをめぐってさまざまに論じられているが、基本的には日常世界からの無縁性、すなわち非日常性という性格をもつ。日常性からみると、それは虚構の世界である。さかり場は虚構が設定されているのである。というところが奇異に思われるかもしれないが、たとえば、夜の社交場は恋愛あるいは男と女にみられるもろもろの関係の儀式とみることが可能である。その虚構を日常性とすることは危険がつきまとう。たとえをもつ。女性の買物。女性の買物心理は理解できないところがあり、想像の域をでないが、女性はファッションを瞬間的に身にまとい、ファッションに合わせて自己を変身させ、いっとき虚構の世界に遊ぶのではなからうか。虚構を日常化することはこれまた危険である。

さかり場は、日用品の店舗があろうと、実用的な機能が用意されていようが、ひとが日常性から脱却可能な虚構の世界であることが基本な

のである。

## ②—辺縁性

さかり場はもうひとつの性格をもつ。それはさかり場は辺縁の場にあるということである。これまた理解が困難なように思われる。なぜなら、現代の都市はさかり場を中心にして構成されていると考えられているし、実際、都市再開発においてもさかり場を中核に据えて計画されている。しかし、さかり場は辺縁に位置しているのである。

都市計画レベルでなく、意識的なレベルから考えてみよう。ひとが意識する空間は住居と職場であって、さかり場は日常的に強く意識されることはない。通勤に通過するとしても、さかり場として意識されない。さかり場として認識されるのはそこに行こうとする意志が働くときのみである。とするなら、都市構成や機能からみていくら巨大であっても、さかり場は意識のうちでは辺縁にあるといわざるをえない。住居からみても職場からみても、さかり場は周辺に位置しているのである。

このことを具体的に示しているのは、市のたつ場所である。荒地、河原、境、津、門前などは日常生活圏と意識される圏域の周辺部にあたる。寺社の多くは、人間の生活空間と自然が支

配する領界の接点に建てられていることに注目したい。こうした地は、自然界への入口であり異郷への出発点でもあった。市はこうしたところにとったのである。

市の辺縁性はさかり場の多くが駅や港を中心に形成されていることに象徴されているように思える。そこからどこかに行けるといふ辺縁性である。さかり場は交通の要衝の地であり、ひとびとがおおぜい集まるからという背景からのみその成立が考えられているが、辺縁の地に形成されてきたのである。

## ③—悪所

さかり場の三つ目の性格は、それが悪所であるということだ。悪所は存在しないから、悪所なるものといったほうがよいのかもしれない。

悪は両義性をもつ。したがって、さかり場にも両義的な性格をもつ。ひとつの側面は反社会性として映る。さかり場が悪の温床とされるのもそのためである。あるいは社会病理（この見方には賛成できないが）とみなされるのもその反社会性のためである。しかし、その反社会性ゆえに、さかり場は既成の概念や価値を打破する可能性を潜在的に有している。つねに解放区になりうるのである。したがって、吉原や芝居町がそうであったように文化を創造する母体でも

ある。

たとえばファッション。これを文化といふるかは異論のあるところだろうが、生活の様式を意味するものとして文化ということばを使う。ファッションはさかり場で生まれ、さかり場で活かされる。さかり場という舞台がなければ、ファッションは成立しない。ファッションをつぎつぎに生み出す活力はさかり場独特のものである。いわば、悪の領域に属する仕業である。さかり場が日常性と交わらないように、ファッションも日常性とはなじまない。さかり場に似合うファッションは、日常性の論理がもつとも貫徹している職場には向かない。前衛的なファッションで身をつつみ、変身を遂げたいうえで、ひとびとはさかり場という巨大な虚構に遊ぶのである。

ファッションばかりでなく、さまざまなジャンルの文化も同様である。

さかり場は悪の温床にもなり、文化の母胎にもなりうる両義的な性格をもっているのである。

## 四—盛り場とコミュニティ

さかり場は年々きれいに装いを改めていく。それも新幹線の発想で。売上げという競争原理

にもとづいて、合理化し近代化し機能化する。かつて、といってもいいだろうが、さかり場は神が仕組んだ巨大な虚構空間であり、そこは俗界とは縁の切れた遊びの間でもあった。自由の精神のもち主が群集し、文化を生みだしていった。しかし、このごろのさかり場はかつての活力を失ったようだ。すくなくとも、文化を創造する能力は落ちていく一方のように思われてならない。

なぜか。画一化した都市づくりを理由にあげることでもできようが、それだけではなさそうである。環境を超えるなにかがある。あるいは環境をつくりだす精神が問題とされなければならぬ。ひとつの視点として、さかり場の日常化があげられる。本来、非日常性であったものの日常性への墮落といえるし、同様に日常性の非日常性への押れ合いと表現することもできる。さかり場に生きるひとは容易に日常性へと転換できるし、日常生活をおくっているひとが安易にさかり場で稼ぐこともできる。プロとアマチュアの区別、日常者と非日常者のケジメがなくなってしまう。

これは空間的にもいえる。東京の吉祥寺。この数年でさかり場として急成長したところである。おおきくさかり場は商店街区とピンク街区に道路をはさんで分けることができる。吉祥寺はストリップ劇場の建設を反対する土地柄であり、生活環境への関心は高いところである。このピンク街は商店街へ進出しようとして虎視眈眈。商店街はこれに対抗して侵入させまいとする。商店街のイメージをおとすからである。しかしそのぶん住宅地へのピンク街の侵蝕がはじまっている。またさかり場の急成長とともに商店街は住宅地へと進入しはじめている。

吉祥寺の場合は、非日常的空間と日常的空間の分離への認識がみられるが、これが一体となっているのが浅草。浅草には、悪所なるものが住宅地に混在し、それは融合していると思えるほどである。浅草にあっては、日常と非日常を同時に生きていることになる。同じ下町の銀座が定住者を追い出す形でさかり場が形成されたのと対照をなす。後者にあっては、定住者の不在は地域性、地域生活の喪失につながるようになる。さかり場が銀座を模してつくられるとす

るなら、それが地域性を失った理由のひとつになるのかもしれない。銀座に二十四時間都市は成立しにくいし、人間くささをもとめるのは無理がある。

さかり場が悪所なるものを薄めさせてゆくと同じ行程で、コミュニティが悪所たるものに近づいていくようだ。コミュニティとさかり場は〈悪〉を媒介にして対置される。さかり場が非日常性のタガをはずし、コミュニティが日常性のカセをゆるめるのにしたがって、悪は拡散する。あるいは文化の創造エネルギーとしての仕掛けは機能しにくくなる。さかり場が美しく装われれば装われるほど、それとの対比でコミュニティが貧しくなる。コミュニティはコミュニティとして自立しえず、さかり場との従属下に置かれ隷属することになる。必要な発想は、さかり場をコミュニティの辺縁におき、さかり場はそれとの関係で辺縁性を発揮することではなかったか。そうでなければ、さかり場の自由は喪われることになる。

〈地域情報研究所代表〉